

忍者になりたいK男

高田 直美

クラスで一番背の高い元気な五歳児のK男。家庭でハットリ君のビデオを見たことがきっかけで、すっかりハットリ君に夢中になってしまったK男と、それに関わる私の話である。

K男のハットリ君ごっこは遊びの時間だけにとどまらず、いつもいつもハットリ君でありつづける。そのために私が、「K男君!」と何かで注意しても、「ちがう! ハットリ!」と、逆に怒られるほどで

あった。

ただ、それほどまでハットリ君に夢中になっ
ていながらも、実際の遊びを見てみると、「ししまる」
役のH男、「かげちよ」役のM男と三人で、走り
回っているだけのように見え、私としては、『もう
少し活動の幅が広がらないかな……』と、やや不満
な目で見ていた。

ある日のこと、いつものように園庭でハットリ君ごっこをしていた三人だったが、M男が大声で泣いている。私が行ってわけを聞くと、K男が、

「だって、見えんってことにしとるのに、M男君が『見える』って言うもん」

と答えた。

どうやらK男は、忍法の術で透明になっているということを想像して楽しんでたのに、その想像をM男がぶち壊しにしたことを怒っているらしい。

まだ泣きながらも「だって見えるやん」と反論するM男に私は、

「うん、見えるかもしれないけど、遊びだから見えても『見えん』って言ったほうが楽しいこともあるかもしれないよねえ」

と、言いながら、K男には、

「もつと本物らしい忍者になったほうが、M男君にもわかるかもしれないよ」

と、「道具を作ったらどう？」という私の気持ちをほのめかしてみた。

次の日、私が折り紙で手裏剣を作ると、すぐにピンときたK男だが、私が一緒に作ろうと誘っても、「やらん。先生が作って」

と言い張る。M男やH男が自分で作ろうとしているのを見てはいるが、それでも作ってもらうのを待つだけである。

ハットリ君であるK男にとって手裏剣は魅力的な道具であつたのは確かである。しかしK男は私が作つた手裏剣を大事そうに自分の道具箱にしまふだけで、それを使って遊ぶということはなかった。

私が『活動の幅を広げてほしい』と考えていたのは、いつもは元気なのに、初めての事や難しそうな事に出会うと、途端に弱気になってしまいがちなK男に、いろいろな事に挑戦しようとする前向きな気

持ちをもつてほしいと願ったからである。しかし、この『手裏剣作戦』は失敗だったようだ。

私の思いとK男の思いとの「ズレ」が問題だったと、今になれば思えるのだが、その時は、『やっぱりK男は尻込みをしてしまった』と感じ、また、K男がやたら威張った態度をとって「作ってよ」と言うのは、できない自分を友だちに認められたくないのだと捉えていた。

その後も相変わらずハットリ君ごっこは続いていたのだが、そんなある日、今度はこんなことがあった。

園庭のテーブルにK男とM男が石を集めて積んでいる。私は『また、何か始まったぞ……』と、少しワクワクしながら、

「何してるのー?」
と聞きに行くと、

「これでマントを作る!」

とK男。

……? 期待してい

たものの、あまりにも意外な返答に驚いてしまい、私は言葉につまった。

「……これで?」

と、ようやく聞き返すと、

「うん、先生考えてよ」

と言う。

「先生はちよつと無理だなあ。K男君はどうやって作るつもりだった?」

「分からん、先生考えて」

そんな難題をかけられたのは初めてである。困った私は、どんなマントがほしいのかをよく聞くと、ハットリ君がムササビのように飛ぶ時のマントがほしいということが分かった。



「それなら、ふろしきで作ったほうがいいんじゃない」

と言うと、

「ふろしきって何？」

と聞いてきたK男だが、次の日の朝、登園すると

真つ先に、

「先生、ふろしき持ってきたよ」

と言いに来た。

早速、K男の飛ぶ練習が始まった。

まず、両手でふろしきの端を持つ。それから足の指で残った端を挟むのだが、自分ではできない。威

張って私とM男に挟ませ、

「いざっ！」

……当然飛べない。

しかも、ちよつと動いただけで、せつかく足の指に挟んだふろしきが取れてしまう。

何度も同じ事を繰り返すが思うようにいかず、イ

ライラしているK男の側で、私はただ面白くて笑つてばかりいたのだが、今度はK男、

「先生、僕を紙飛行機みたいに飛ばして」

と……。

それはさすがに無理だと言つても、

「僕のお父さんはできる」

と言つてきかない。

仕方なしに、K男を抱きかかえ、

「えいっ」

と大げさな掛け声で、軽く投げるが、

「持ち方がちがう」

と、どうしても納得してくれない。

私はほんとと困りながらも、K男の言う通りに何度も投げる真似をしていた。そして、あまりにK男が生真面目なため、さらに面白くなって笑つてばかりいたのだったが、ふと、

「あれ……？」

と、思ったことがある。

私は、K男に対して『難しそうな事には消極的』という捉えをしていたのだが、今のK男の姿はどうだろう。

ふろしきで空を飛ばうなんて、そんな不可能なことを、真剣に、とことん取り組んでいる姿から、そんなことが言えるのだろうか。

それよりも自分の思いを貫き通そうとするK男を、K男の姿として捉えるべきだと思ったのだった。

つまり、保育者として、子どもをある視点から捉えることは必要なことだけれど、私はどちらかというと、“私にとって気になる点”を中心とした捉えに偏りがちだったのではないかと気付いたわけであ

る。

“子どものいいところ”をたくさん見つけて、それをもっともつ

と伸ばそうとする気持ちでいたら、子どもに対する援助の方法は、もっとおおらかで暖かなものになるのでは……と、感じたのだ。

話は飛ぶ練習に戻るが、どうしてもうまくいかなくて焦っているK男に、私は、ふろしきの端の二つにゴムを輪にして縫いつけ、足首に通せるようにすることを提案した。

「そんなの、ハットリ君じゃない」

と、反対するK男を、

「それで上手に飛べるようになったら、はずして練習すればいいから」

と、なんとか説得し、ふろしきにゴムを縫い付け



た。

それは我ながらいいアイディアだったと思う。まず、自分で簡単にスタンバイができるし、自由に走り回ることができる。その上、走ると風でふろしきが脹らみ、なおさら飛ぶ感覚に近づける。

K男は大喜びで、「修行やー」と走り回って遊んだ。私は……と言えば、体の大きいK男を投げ飛ばすことから開放されてホッとしていたのだが。

結局、どこまで本気でK男が飛ぼうとしていたのか、その気持ちは分からない。

けれども、私には理解できないほどの世界をもつてるK男を、そんなK男だからこそ『面白い』と、心から感じる。

実は、私自身も子どもの頃に、（K男ほどではないが）ハットリ君に憧れていた事を思い出す。ある時私は『足の裏に釘をつけるとハットリ君のように

壁を歩くことができる』という話をどこからか聞きつけ、試しに釘を靴の裏にセロハンテープで貼り付けて壁を歩こうとしたことがある。

自分自身の思い出であるのにもかかわらず、『子どもって不思議だなあ』と、他人事のように感じてしまう。だから、どんな子どもにでも、大人には理解しがたい世界があるような気がしてならないのだ。

そんな子どもたちの“不思議な世界”に、驚かされたり、笑わされたりしながら、これから子どもと共に、楽しい日々を過ごしていきたいと思う。

（岐阜県土岐市立肥田小学校附属幼稚園）